

今回は八木三郎氏にお話を頂いた後半である。

八木三郎氏の講演

昭和39年に開催された東京パラリンピックは障害者福祉の世界に大きな衝撃を与えました。今まで障害のある人が、車いすに乗っている人が仕事をするとか、スポーツをするとかという考え方は当時の日本には稀有なことでした。しかし、それをいとも簡単にパラリンピックの中で海外の選手はアピールし、可能なことを証明してくれたわけです。仕事にも就いている。じゃあ、仕事に行くにはどうして行ってるのか？ 車で通っている。え、車いすに乗っていて車なんて乗れるの？ という具合です。従来からの、日本人の考え方を、障害者観をことごとく打ち砕いたのが実は東京パラリンピックだったのです。このパラリンピックを契機にその後、少しずつ日本の様々な障害分野の世界が変わっていったのです。

とは言っても、私が車いすに乗るようになった昭和42年頃は、まだまだ福祉の「ふ」の字も言わない時代でした。“障害者”と言われる人たちは街に出てくる人たちではない、施設か、病院にいる人だというモノサシでいつも見られていました。ですから、当時の私はみんなからそういうモノサシをあてられるわけです。例えば、車道と歩道に段差があります。車いすではその段差を自力で越えられない。自分で何度も段差を上がろうとするのですがなかなか上がれない。通りがかりの人に、「すみません、ちょっと上げてもらえますか？」とお願いするのですが、実はこれが空振りになる。10人に声をかけると8人は空振りになる。手を貸してくれないのです。何故、力を貸してくれないのかと、14歳の私には悲しく思いました。

そうした人々との触れ合いから、何が見えてくるのかということ、社会の人たちの障害に対するものの見方、考え方が見えてくるのです。色々なところに出てくるわけです。例えば、私が家族5人で、あるお好み焼き屋へ行ったときの話です。そこは段差のないお店で、車いすで可能なところでした。ガラガラと戸を開けるなり、中からお店の人が出てきて、「あの～、車いすの方はちょっと…」と、モゴモゴと言うのです。早い話が、車いすの者は店の中には入れなかったのです。車いす以外のあとの家族4人の方はどうぞ、という訳です。私だけ入れてあげないということです。こんなことが、当時は当たり前のごとくにあったのです。他にもこういう話は山ほどあり、明日の朝までしゃべってもいいぐらい日常茶飯事でありました。

飲食店だけではなくありません。電車にも車いすの者は乗せてもらえなかったのです。仮に電車に乗ろうとすると、駅員さんが来て、「すみません、車いすの方は…」ということで電車から降ろされる。そんなことが山ほどあった時代が昭和40年代前半のことでした。そういう中を通ってきた私にとって、障害者スポーツの果たす役割も、あり方も時代の流れに乗って、変化してきたといえます。

昔のことですが、私はアメリカに留学する機会がありました。アメリカでの生活は、まさしく目からウロコが落ちるというものでした。日本では何かにつけ、障害を理由に拒否されることが多かったわけです。しかし、アメリカではそうではありませんでした。例えば、「八木、おまえ水上スキーやらないか？」

と声がかかりました。私は14歳の時から車いすで、いつも社会の壁にぶち当たっていた者からするならば「水上スキー」と言われ、その言葉を疑ったぐらい衝撃的な出来事でした。

それで、日曜日にロングビーチへ来いというわけです。私も言われるまま、ロングビーチに行きました。その日は水上スキーの大会で、「お前も乗れよ。」と言われ、動揺したその時のことを今でも覚えています。日本では障害者スポーツをする以前の話でありました。お好み焼き屋で車いすという理由でお店の中に入れてもらえない社会で、スポーツをするなんて考えられなかったわけです。しかし、アメリカでは水上スキーをやらなかったかと誘われ、わが耳を疑ったぐらい驚いた出来事でした。これ以外にもいろいろありました。私の身元引受人の方から、今度の日曜日に、内容など全然言わないで、あるところへ来いと言われました。そして行ってみると、エアロビクスの大会でした。その時も、大変驚いたのですが会場で、英語のアナウンスで紹介したい人がいる。という司会者の言葉が聞こえ、その後、「フロム ジャパン！」と言って、誰なのかなと思っていると、「ミスターヤギ！」と紹介されたのです。早い話が、ロサンゼルスのあるアリーナに5千人ほど入っていたと思いますが、みんなの前で私を紹介したのでした。エアロビクス大会のデモンストレーションに、日本から来ている車いすの私が、みんなの前でエアロビクスを踊ることになったのです。しかし、私はエアロビクスなどしたことがありません。しかし、私の横にはレオタードを着た女性が一緒にやろうと勧めるのです。そして音楽がなり、どうぞ！と言われて、何もできずに茫然としている私に音楽にあわせて踊れというのです。アメリカでの生活では車いすだからできないというモノサシではなかったのです。この他にも、車いすテニスやゴルフもやらないかと誘われ、様々なスポーツにトライしました。

日本での障害者スポーツの歴史を顧みるとやはり、昭和39年の東京パラリンピックを忘れることはできません。そのパラリンピックがあった次の年から、全国身体障害者スポーツ大会が始まりました。毎年、国民体育大会(国体)があるわけですが、国体が終了した後に全国身体障害者スポーツ大会(現・全国障害者スポーツ大会)が開催されています。しかし、当時の障害者スポーツは楽しむというよりは、いわゆる、リハビリテーション、できないことが少しでもできるようにという身体機能回復の訓練の延長としての障害者スポーツという捉え方がありました。

今日までの多くの障害当事者、また関係者の不断の努力が現在の障害者スポーツを産んだといっても過言ではありません。その礎となったのが、東京パラリンピックであり、その障害者スポーツを通して多くの感動と勇気を人々に与え、社会を変えてきたといえるでしょう。

